

事故報告書分析による傾向性と KYT 訓練

聖隷クリストファー大学 水野尚美

浜松中央長上苑 宮澤歌子

1

研究の背景：介護事故の要因

1

介護人材不足
職員の負担過多

2

利用者の状態の
変化

3

環境要因

2

ハインリッヒの法則

01

1 件の
重大な事故

02

29 件の
軽微な事故

03

300 件の
ヒヤリハット

3

人手不足・職員の負担過多

人手不足により、職員一人あたりの業務量が増加

疲労やストレスの蓄積

注意力の低下

介助時の判断ミスや確認不足が生じやすい

4

利用者の状態変化

高齢者：身体機能や認知機能の日々の変化

転倒や誤嚥、徘徊などのリスク

職員が“いない”“見えていない”時間

職員が気づけず、適切な対応の遅れ

5

環境要因

施設特有のレイアウト

物理的な問題：床の滑りやすさ、段差、照明不足

工夫や点検が必要なレイアウト：器具や家具の配置

適用の悪さ：利用者に合っていない福祉用具

6

打開策の提案

1

介護技術不足

知識不足

* 正しい移乗・介助

2

コミュニケーション不足

- ・ 職員間の情報共有
- ・ 利用者の体調やリスクの共有

3

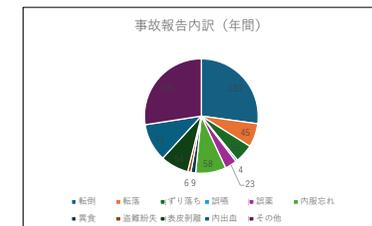
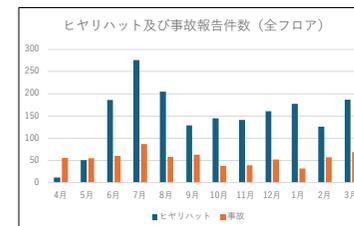
マニュアル・ルール

未整備

未遵守

7

全体



結果：7月と8月にヒヤリハットがピーク。転倒及びその他の事故中心。

考察：ヒヤリハットが多発している時期は事故のリスクも高まる可能性がある

8

危険予知訓練 (KYT) Kiken Yochi Training

01

労働災害の防止

- ・自発的な危険認識の促進
- ・意識の共有と風土の醸成

02

安全意識の向上

- ・潜在的リスクの洗い出し
- ・具体的な予防・対処法の習得

03

介護職チームの組織力

- ・現場からのフィードバック
- ・リスクコミュニケーション

9

リーダー研修

01

2024年度事故報告書の分析結果確認

02

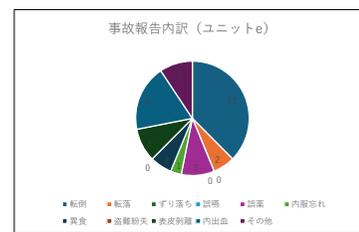
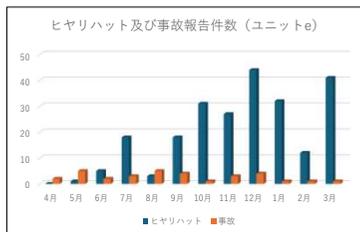
リスクマネジメントについて講習

03

自職場の環境面から配慮すべき点についての意見交換

10

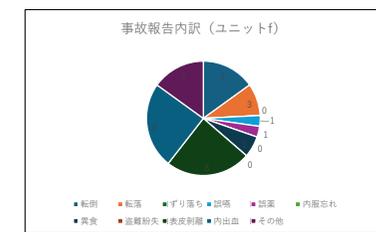
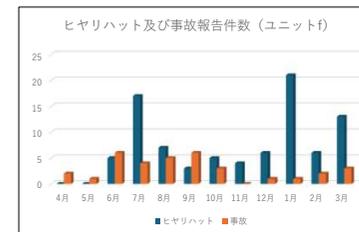
ユニットe



結果：年末（12月）と年度末（3月）にヒヤリハットがピーク。転倒事故中心。
考察：繁忙期にリスク増加。ヒヤリハットを適切に活かし、繁忙期の支援策が重要。

11

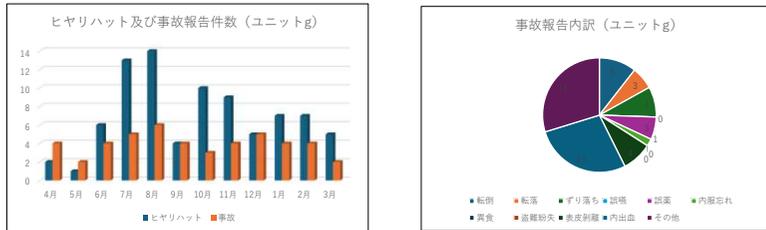
ユニットf



結果：7月と1月にヒヤリハット増加。事故報告は少なめだが、転倒と表皮剥離あり。
考察：ヒヤリハットが予防的に機能。早期の対応策をさらに強化すべき。

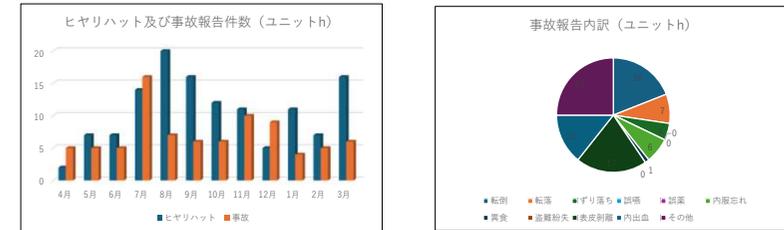
12

ユニットg



結果：夏季と年度末にヒヤリハット増加、事故も微増。表皮剥離・転倒が主。
考察：ヒヤリハットと事故が連動。季節ごとのリスク管理を徹底する必要あり

ユニットh



結果：通年でヒヤリハット・事故ともに高水準。転倒・誤薬事故が多い。
考察：職員の業務負担や環境整備不足が影響か。根本的な対策が緊急課題。

13

14



研修後のアンケート結果

- ①ヒヤリハットと事故発生の関連性を実感
- ②ヒヤリハットの重要性を再認識
- ③写真による発見は可能。さらに意見交換をすることで、より気づけることがある
- ④普段のユニットの何気ない所も、危険予測できるようにしたい
- ⑤視野を広げ、多くの気づきができるようになることを記録や職員同士のコミュニケーションで共有していきたい

15

16

現状からの考察

- ①ヒヤリハットと事故発生の強い関連性
- ②季節性・時期別の事故傾向の存在
- ③各ユニット特有の事故要因と対応策の必要性
- ④ヒヤリハットを効果的に活かすためのKYT訓練の重要性
- ⑤介護職員の業務負担軽減・環境整備の重要性

17

結論

- ヒヤリハット報告は事故の予測指標として重要な役割を果たす。
- 季節や時期ごとの事故傾向を考慮した適応的な対策が必要である。
- フロアごとの事故特性に応じた個別の予防策が重要である。
- KYT訓練を積極的に導入し、ヒヤリハットを事故予防に活かすことが求められる。
- 根本的な解決策として、職員の負担軽減と施設環境の整備が重要である。

18

ご清聴ありがとうございました。

19